

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の
「ふくまん ～コスモポリタン性を持つ唐人～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2025 年 8 月 29 日(金)

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

ふくまん

「天正十六年参宮帳」という史料があります。16世紀末、九州の豊後や肥後から伊勢神宮（三重県伊勢市）に参詣した人々を、神宮の御師（参拝者の世話をする神職）が記録した名簿です。

「いなりまちしゅ」「唐人まちしゅ」とは、それぞれ稲荷町と唐人町の「まちしゅう」（町衆のこと。両町は、16世紀の府内の中央に位置する大友氏館の北にあり、都市を南北に貫くメインストリートに面した地区です。その隣り合った町の8人が連れ立って豊後を出立し、伊勢参拝を遂げたのでした。

このうち、稲荷町衆の喜衛門以下6人は日本人名ですが、唐人町衆の2人は「かけゆ」（勘解由）という日本人と、「ふくまん」という中国人です。このことから、戦国時代の九州各地に形成された唐人町には、「ふくまん」ら唐人（中国人）のみでなく、日本人も混住していたことが分かります。

中世日本の港町や都市の中で、渡来中国人を中心として形成されたのが唐人町です。そこは、当時の都市空間の中で、異質な性格の外国人町として隔離・孤立して存在していたのではありません。彼らは、外国人コミュニティを形成しながらも在来日本人と雑居し、お蔭参り（お伊勢参り）などの信仰文化を自らに内在させる行動を取っていました。この唐人たちの意識は、極めて興味深いものです。

16、17世紀に渡来してきた中国人たちは、決して閉鎖的な

府内唐人町に隣接する称名寺の堀で出土した唐枕（大分県立埋蔵文化財センター蔵）



マイノリティー集団に没することなく、在来日本人との血縁関係を深めました。さらに、近隣町人と交流しながら、日本社会に順応・同化していくコスモポリタン性（国際性・世界市民性）を有していたといえます。

近年の発掘調査によると、16世紀後半の府内の唐人町とその周辺の遺跡から、売り物ではない溶着した陶磁器破片や窯道具、骨細工・角細工の素材・廃材、唐枕（中国の枕）などが見つかっています。これらは中国陶磁器の輸入に携わった商人、骨・角細工の職人らが居住していたことを示す物証であり、「ふくまん」ら唐人たち

のなりわい解明の手掛かりとして今後の調査の進展が期待されます。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載